

垂直他界観と水平他界観の交錯・『古事記』の宇宙論

——「葦原中国」と「黄泉国」・「根之堅州国」の関係性を焦点に——

東原 伸明

(2006年10月31日受付、2007年1月15日受理)

On the Cosmos of Kojiki: Mixture of the Other Worlds Vertical and Horizontal
—Focusing on 'Ashihara-no-nakatsukuni', 'Yomotsukuni' and 'Nenokatasukuni'—

Nobuaki HIGASHIHARA

(Received : October 31 2006. Accepted : January 15 2007)

要 旨

『古事記』の宇宙は、三層の垂直構造によって成り立っていると従来が、従来の理解であった。近年、その垂直性が否定され、「黄泉国」・「根之堅州国」を焦点とした地下他界という理解は揺らぎ、水平方向に他界が設定される論が提示された。もはや三層の垂直宇宙論という通説は無批判では受け入れられなくなったのが、研究の現在である。しかし、矛盾を排除したところに合理的に他界を設定した新説も、通説と同じ意味での弱点を有していることから再考を試みた。小稿は、垂直他界観と水平他界観の交錯という、近代合理主義の思考を批判する観点から『古事記』の宇宙論を提示する。

Abstract

It has been widely understood so far that the cosmos of Kojiki consists of three vertical strata. Recently, however, the structural verticality of Kojiki is negated; horizontal structure

of the other world is presented, denying the underworlds represented by Yomotsukuni, Nenokatasukuni. Currently the conventional theory that the cosmos of Kojiki consists of three vertical strata is not accepted readily.

New theories, rationally explaining that the other worlds are horizontally existed, have also some defects as the conventional theories do. In this paper I will present my notion of the cosmos of Kojiki, criticizing the thinking of modern rationalism.

キーワード

近代合理主義批判・他界の交錯・矛盾・不合理・不整合

Key words:

(criticism of modern rationalism, mixture of the other worlds, contradiction, irrationality, incoherence)

所属・学位

本学文化学部文化学科助教 文学修士

Academic Appointment & Degree:

Associate Professor, Department of Cultural Studies, Faculty of Cultural Studies at

Kochi Women's University (Master of Arts)

1 「垂直」か「水平」か——二者択一的な思考の陥穽

『古事記』の神話的宇宙は、「高天原」・「葦原中国」・「黄泉国」・「根之堅州国」・「綿津見神之宮」等によって構成されている。

これらは従来、天上の「高天原」地上の「葦原中国」地下の「黄泉国」と「根之堅州国」、そして海底の「綿津見神之宮」というふうな、それぞれが「天上／地上／地下・海底」という垂直的な上下の関係で存在していると考えられていた。つまり、三層の垂直宇宙論である。

ところが、近年こうした通説に対して疑義が持たれるようになった。佐藤正英の論やその佐藤説を批判的に継承する神野志隆光の論が提示されるに至って、「黄泉国」・「根之堅州国」・「綿津見神之宮」は必ずしも垂直的に描かれているとはいえないことが確認され、三層の垂直宇宙論という捉え方は大きく揺らぎ出し、どうやら根底からの見直しが必要ならなくなってしまうというのが研究の現状である。

問題の焦点となるのは「黄泉国」と「根之堅州国」がどの方向にあるのかという二つの他界の位相の問題であり、「黄泉国」は佐藤説と神野志説とによって、また「根之堅州国」は神野志説によって、それぞれ従来の地下他界という認識が完全に否定されてしまった。「黄泉国」も「根之堅州

国」もともに「葦原中国」の地下にはあらず、黄泉比良坂を隔てた遠く水平方向にあるであろう他界として、位置が据え直されてしまったのである。

ただし、私見では佐藤や神野志らの論は、通説に反を唱えることに性急なあまり、確かに『古事記』に描かれているものさえも、己の主張する説に都合良く無視・排除してしまっているところがあるのではないのか。思考の振り子がタテからヨコへと正反対に振れてしまったことによって、従来「垂直」と考えられていたものを、すべて「水平」に持っていくってしまったのだが、果たしてそれによって、『古事記』の宇宙の実態を解明したことになるのだろうか。「地下他界」という要素、大地的なイメージを、まったく排除できるのか。ここには、「垂直か水平か」という二者択一的な近代的合理主義の思考が反映してしまっているのではないのか。

「水平性」と「地下他界」→「地中の他界」という性格とは、果たして相容れないものであろうか？『古事記』は、種々次元の異なる氏族伝承が集成され、幾度もの編集の手を経たことにより成立したものであることを忘れるべきではなからう。矛盾はまさにそうした点に生じたはずである。序文によれば、天武天皇が「邦家の経緯、王家の鴻基」たるべき「帝紀」〔旧辞（本辞）〕を削偽定実して定本化を試みたが、討駁を経たものを稗田阿礼に誦み習わせただけに終わっていたのを、元明天皇の命により太万侶が完成させたとある。

神野志隆光は小学館新編日本古典文学全集『古事記』の「解説」において、『安万侶の書く営みは、阿礼の誦み習ったのを文字化しただけだということにならない。大事なのは、安万侶によって、初めて、文章として書かれたものをそれだけで日本語として読まれ、理解されるものが成されたということである』、『字の種類を絞り、訓を統一し、多数の注をつけてそれを果たしたとき、そこに実現されるのは、天武朝にありえたかもしれないものとは異質な、一貫性と統一性をもった作品だというほかない』と

評価している。だが、現行『古事記』は、神野志が評価するように、果たして《一貫性と統一性をもった作品》などといえるであろうか。だとしたらこの「水平性」は、安万侶の編集の意図を超えて出てきてしまった綻びなのではないだろうか。むしろ、『古事記』は、《一貫性と統一性をもった作品》ではないからこそ、そうした矛盾が胚胎したものではないだろうか。

だから、「垂直」から「水平」にしてしまうことによつて、その矛盾をすべて捨象し解消してしまうのは根本的に間違ひなのではないのか。矛盾点も含め現行の『古事記』だとすれば、そのありのままの姿という観点からの説明がなされてしかるべきであろう。

矛盾という点では、「葦原中国」と「黄泉国」の関係性に焦点を合わせてみるならば、従来必ずしも「黄泉国」が垂直方向に、つまり、「葦原中国」の地下にあるとばかりは理解されてこなかったことも事実である。たとえば松岡静雄は、

我がヨミ神話には、少しも地下という趣は出て居らず、出雲からヨモツ平坂を越えて地続きであるかのやうに物語られて居るのである。⁵⁾

という指摘をしていたし、松村武雄も、

記・紀の神話によれば、黄泉国は地下に存するやうでもあれば、葦原中国と同一平面上の遠いところにあるやうにも思はれる。黄泉平坂の在り方がさう思はせるし、『古事記』神代巻の大国主神の神話でも、素戔嗚尊がそこまで追ひかけて来て大国主神に呼びかけたところとしての黄泉平坂は、この国土と平面的につながつてゐるやうな説きさまになつてゐる。⁶⁾

と説いていた。特に後者の松村が《黄泉国は地下に存するやうでもあれば、葦原中国と同一平面上の遠いところにあるやうにも思はれる》といふように、『古事記』の宇宙が、地下と同一平面という垂直性と水平性と

が並存している不合理で矛盾した世界であることを読み取っていたことは、注目に値しよう。なぜならば松村の指摘は『古事記』という書物が、我々の拠つて立つ近代合理主義の思考（合理観）では捉え難いものであることをはからずも示唆しているからである。通説への批判として提示された、佐藤と神野志の論ではこの垂直性の部分が、思考の中からまったく排除されてしまつてゐるのである。

私が垂直性と水平性となぜ拘るのかといえば、垂直性は上下の関係、位階序列（ヒエラルキー）であつて、端的に権力構造を意味しているからであり、水平性は、後述するように民俗の他界観、基層文化を意味する。垂直他界観は新しく政治的であり、水平他界観は古く伝統的である。しかもその二つが交錯し並存していると松村は読んだ。繰り返すが、こうした不合理・不整合・矛盾が生ずるのも、『古事記』という書物じたいが、次元の異なる種々の氏族伝承を、時々の王権に都合よく編集したものであるからなのだろう。だから整合性は甘く、一貫性はないのである。

2 〈アメ〉—〈クニ〉垂直二元の区分意識と「高天原」—「葦原中国」中心の宇宙観

西郷信綱⁷⁾を通説の典型として垂直的な三層構造の宇宙観を批判する神野志隆光は、「高天原」—「葦原中国」は、〈アメ〉—〈クニ〉の二元的対立を具現するものであり、「黄泉国」—「葦原中国」、「根之堅州国」—「葦原中国」、「綿津見神之宮」—「葦原中国」も〈クニ〉の次元の問題なのであるといふ。⁸⁾「高天原」といふ〈アメ〉の区分に対しては、「葦原中国」も、「黄泉国」も、「根之堅州国」も、そして「綿津見神之宮」も等しく〈クニ〉の範疇に在ると考えるべきだといふのであり、区別して捉えることが必要なのだといふ垂直二元の区分意識を提示する。だから、

〈クニ〉の次元を超えた「地下」というような第三極の範疇に「黄泉国」を据えるわけにはいかないというわけだ。西郷信綱の説は通説として支持を得ているが、次元の異なるものを無媒介にひとつにして構造化してしまっている点において、神野志の批判の対象となつてしまったというわけである。

「高天原」と「葦原中国」とは、「天上／地上」という垂直的な上下の関係、権力関係に拠っていることになる。「高天原」から「葦原中国」へという上下関係を中心に置き、水平方向のそれぞれ周縁に「黄泉国」、「根之堅州国」、そして「綿津見神之宮」が存在するだろうというのが神野志の主張である。

また、神野志隆光は『古事記』成立の歴史的背景を、中国との冊封体制からの離脱と自らはその中華大帝国の模倣である小帝国建設のための実践イデオロギーの表出として捉えている。

冊封関係を離れ、自分たちの世界を作ることの要求として、律令国家へと向かう。「天皇」のもとに成り立つ世界「日本」を構築するのである。その本質は中国古代帝国の世界構造を模倣して自ら一つの「帝国」たらしめることにある。具体的には朝鮮を藩国として従属させて、「大国」として、天皇の世界を成り立たせようとする。中国のミニチュア版であり、石母田正『日本古代国家論第一部』などがこれを「小帝国」と呼んだことは本質を言い当てている。東アジア世界のなかでは、中国古代帝国の世界構造を模倣する以外に自らの世界を形成する道はなかったのである。⁽⁹⁾

かくして「葦原中国」の「中国」は、中華中国の「中国」のイメージによつて捉えられることになる。⁽¹⁰⁾

3 「黄泉国」と「根之堅州国」の位相―「山中他界」から「水平方向」の他界へ

「葦原中国」の地下という垂直性、タテの方向に他界Ⅱ「黄泉国」を想定する通説を否定する佐藤正英は、亡くなったイザナミの死体が葬られたのが「比婆之山」という山であったという叙述に注目する。⁽¹¹⁾

故、其の、神避れる伊耶那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき。
(43頁)

たしかに山中に死体を葬ること、葬制が山を他界として「黄泉国」をイメージする思想を形成したのであろう。その痕跡はある。たとえば『万葉集』巻第二「十市皇女の薨りましし時、高市皇子尊の作りませる歌三首」のうちの一つに、

158 山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

(桜井満訳注 旺文社文庫)

がある。山吹の花の「黄色」と山清水の「泉」で、「黄泉」を連想させる。また、死体を葬った場所じたいが、特定のイメージを醸し出すこともあるだろう。巻第三「土形娘子を泊瀬山に火葬る時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首」、

428 こもりくの泊瀬の山の山のままにいさよふ雲は妹にかもあらむ

あるいは巻第七「挽歌」に、

1407 こもりくの泊瀬の山霞立ち棚引く雲は妹にかもあらむ
1408 狂語か逆語かこもりくの泊瀬の山に廬すといふ

「こもりくの泊瀬」の地は、大和平野の東方に位置し、南の多武峰と北の巻向・三輪・穴師の山々に囲まれた泊瀬川流域をいう。「長谷」とも宛て字される。この「泊瀬」の地が柿本人麻呂の歌にもあったように死者の埋葬地であったことから、「泊瀬」の「ハツ」の音に、「果つ（終わる）」の連想が働いて、「果つ瀬」＝「この世の果て」の地の意となる。死者の世界との境界が「泊瀬」であり、その向こうに他界が、「黄泉国」があるのだということになろう。

姨捨伝説の地、信州の「姨捨」も山間地であり、「オバステ」は、「オハツセ」であり、棄老伝説が形成される以前の古代において、大和の「泊瀬」同様に死者の埋葬地であったろうことは、十分推定できる。

また、泊瀬＝長谷が後世において観音の利生の地として、長谷観音の信仰の地となり、人との再会が霊験として説かれるようになったのも、そこに行けば死者との再会が叶う地、「ハツセ」「オハツセ」という素地があったということである。

さて『古事記』は、確かにイザナミの死体を山中に葬った。しかし、問題は「比婆之山」という山中が、そのまま「黄泉国」たりうるか、どうかである。『古事記』は「黄泉国」の時空を、どのようなものとして語っていたのか。

是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見しめつ」といひて、即ち予母都志許売を遣して、追はしめき。爾くして、伊耶那岐命、黒き御縵を取りて投げ棄つるに、

乃ち蒲生子生りき。是をひ食む間に、逃げ行きき。猶追ひき。亦、其の右の御みづらに刺せる湯津々間櫛を引き開きて投げ棄つるに、乃ち笋生りき。是を抜き食む間に、逃げ行きき。且、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾くして、御佩かしせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。(47頁)

この叙述を読む限り、タテの方向性というイメージは無い。むしろ私にはヨコからヨコへとイザナギが逃げて行くヨコの方向、水平性しか読み取ることができない。およそ垂直的なイメージはないといえるだろう。

最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。爾くして、千引きの石をその黄泉ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、……(49頁)

佐藤正英の主張は、およそ以下のとおりである。「坂本」は坂の麓を意味し、「坂上」に対する語である。イザナギは、黄泉比良坂の麓(坂の下)まで逃げてきて、そこに「千引きの石」を置いて黄泉比良坂を塞いだものと読み取れる。通説では、「黄泉国」は地下にある他界なのであるから黄泉比良坂は、地下へ向かって下っている坂でなければならぬはずなので、『古事記』の叙述を読む限り黄泉比良坂は、「葦原中国」の側から見て、上へ向かって登っている坂として語られている。つまり、イザナギは、黄泉比良坂を逃げ下ってきてその麓にまで辿りつき、そこで「事戸を渡」したことになるのである。つまり、黄泉比良坂は、上へ向かって登っている坂、いわゆる山坂として表象されているのではなからうかと。

故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。

(49頁)

『古事記』の叙述を忠実に辿れば、確かに佐藤の指摘するように坂の上に「黄泉国」を想定しなければならなくなるのだが、その場合「高天原」との関係はどうなるのか？という疑問が新たに生ずるだろう。

西條勉は、『万葉歌の例などを考えれば、むしろ山中他界の方が広く民間に浸透していた死者の世界であったようにおもわれる。すくなくとも「黄泉国」が、はつきりと地下の世界として描かれていないのは事実であろう』という¹³⁾。

だとすれば、ここには『古事記』が採用した原資料ともいべき古伝承の「山中他界」観が、整合性や一貫性が考慮されることもなく、まさにそのまま表出されてしまった、反映・残存と考えざるをえないだろう。それが『古事記』の文脈において坂の上方に「黄泉国」を想定せざるをえないような、矛盾を生じさせたと理解すべきである。

佐藤正英は、井手至の語源説を援用して、坂の上に「黄泉国」を実体化しようとする。井手は次のように説いていた。

上代の国語に、山岳的他界を意味する語として、山の意のヤマの母音交替によつて構成された語としてヨモ(ヨミの被覆形)があつたように、ヲト(ヲチの被覆形)は、海洋的他界を意味する語として、海の意を表わすワタの母音交替によつて構成された語であつたと見られな¹⁴⁾いであろうか。上代において他界と親じられた山と海とは、それぞれ他界を意味するヨミ(ヨモ)、ヲチ(ヲト)の語を分立せしめていたわけである。

しかし、遺憾なことには『古事記』の「黄泉国」の話のどこにも「山」

のイメージを読み取ることができないのは、この説にとつて致命的ではないのか。佐藤の『黄泉比良坂は、上へ向かつて登っている坂、いわゆる山坂として表象されている』という「山中他界」の反映・痕跡の指摘をしたものとして認めるにやぶさかではないが、神野志隆光も説くように、『大事なのは、〈クニ〉の次元で、「葦原中国」と上下の世界関係というのではなく同じ平面においてかわるもの』と理解し、黄泉比良坂という境界においては、水平方向に「黄泉国」をイメージすべきであろう。

「根之堅州国」については、どうだろうか？

爾くして、其の神の髪を握り、其の室に椽ごとに結び著けて、五百引の石を其の室の戸に取り塞ぎ、其の妻須勢理毘売を負ひて、即ち其の大神の生大刀と生弓矢と、其の天の沼琴とを取り持ちて、逃げ出でし時に、其の天の沼琴、樹に払れて、地、動み鳴りき。故、其の寝ねたる大神、聞き驚きて、其の室を引き仆しき。然れども、椽に結へる髪を解く間に、遠く逃げき。／故爾くして、黄泉ひら坂に追ひ至りて、遙かに望みて、呼びて大穴牟遲神に謂ひて曰ひしく、……

(83～85頁)

神野志隆光は、『古事記』における「望」の字の用例を検討して、『遠望の意で一貫する。ある広がりをもって見る場合』(「黄泉国」)だとし、新編日本古典文学全集頭注二(83頁)においても、『諸注はこの「望」をミサクと読むが、この字の訓としてはノゾムが普通。「記」の「望」は、遠く見る意を表すものがほとんどで、高みから遠望している例が多い。こ¹⁵⁾こも、須佐之男命は坂の上に立ち、その下に水平的に広がる葦原中国を見やっつているのである』とする。水平的なイメージは、確かにあるようである。

4 「毗の国」の意味―「黄泉国」と「根之堅州国」との共通項

黄泉比良坂は、イザナキの黄泉国神話とオホクニヌシの根之堅州国神話に登場する。そして、「葦原中国」と「黄泉国」・「根之堅州国」とは、この黄泉比良坂という「坂」を共通の境界としている。ただしこの坂は、不思議なことに帰路の話ばかりに登場して、往路には絶えて出てこない。イザナギがどのように「黄泉国」へ行ったのか、あるいはまたオホクニヌシ（「オホナムチ」）がどうやって「根之堅州国」へ行ったのか、その往路はともに不明であるとしかしいようがない。

黄泉比良坂という名称から考えた場合、「黄泉国」と「葦原中国」との境界が、黄泉比良坂によって仕切られていることは特に問題を感じないだろうが、「根之堅州国」との境界も黄泉比良坂であるのは些か不可解である。神野志隆光の見解にしたがえば、「根之堅州国」は、「黄泉国」よりもさらに水平方向の遠方⁽⁴⁹⁾にあり、黄泉比良坂を通らなければ「葦原中国」には帰ってこれないということらしい。

もとより「黄泉国」・「根之堅州国」とはその名称も異なるように、まったく別の領域の世界であり、『古事記』においても混同がなされているわけではない。「黄泉国」はイザナミが黄泉津大神として君臨する「死の国」であり、「根之堅州国」はスサノオが主宰しオホナムチが修行により、死（↓仮死）と再生を繰り返すことで最終的にオホクニヌシ（大国の主↓「葦原中国」の国魂）となるための「再生・生成の国」である。

「死の国」と「再生・生成の国」という決定的な差異がありながら、「黄泉国」と「根之堅州国」とは黄泉比良坂を共通に「葦原中国」との境界としている。だから問題は、「黄泉国」と「根之堅州国」との共通する文化的な背景は何かということだ。神野志隆光の論は、この点を明かして

くれていない憾みがある。

アマテラス・ツクヨミ・スサノヲという三貴子は、「黄泉国」から戻ったイザナキが、

「吾は、いなしこめ、しこめき穢き国に到りて在りけり。故、吾は、御身の禊を為む」とのりたまひて、竺紫の日向の橘の小門のあはき原に到り坐して、禊祓しき。(49頁)

と、その死のケガレを除去するために為した禊の中から誕生している。

是に、左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、天照大御神。次に右の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、月読命。次に、御鼻を洗ひし時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。(53頁)

イザナキは三貴子それぞれに、統治すべき領域を指定している。

天照大御神に賜ひて、詔ひしく、「汝が命は、高天原を知らせ」と、事依して賜ひき。故、其の御頸珠の名は、御倉板拳之神と謂ふ。次に、月読命に詔ひしく、「汝が命は、夜之食国を知らせ」と、事依しき。次に、建速須佐之男命に詔ひしく、「汝命は、海原を知らせ」と、事依しき。(53頁)

イザナキの命に反してスサノヲだけは、指定された領域の統治を拒む。

伊耶那岐大御神、建速須佐之男命に詔ひしく、「何の由にか、汝が事依さえし国を治めずして、哭きいさちる」とのりたまひき。爾くして、

答へて白ししく、「僕は、妣が国根之堅州国に罷らむと欲ふ故に、哭く」とまをしき。爾くして、伊耶那岐大御神、大きに忿怒りて詔はく、「然らば、汝は、此の国に住むべくあらず」とのりたまひて、乃ち神やらひにやらひ賜ひき。(55頁)

スサノヲにおいては、「妣が国」＝「根之堅州国」であり、「妣が国」＝「黄泉国」ではない。スサノヲにとってイザナミは母ではないのだから、「黄泉国」がすなわち「妣が国」でないのは、その意味で当然である。しかし、スサノヲは、いはば「黄泉国」の死のケガレ、その禊から誕生しているのだから、「黄泉国」とはまったく無関係だともいえない。だとすれば、積極的にその共通項、「黄泉国」と「根之堅州国」の共通する文化的な背景というものを想定することは、それなりに意味のあることではないだろうか。

たとえば次の中村啓信の意見などは、たいへんに示唆的である。

根の堅州国なる洞天世界は、「黄泉」世界とはもう一つ別世界であるが、洞窟性と洞天性をともに内在する点で共通の価値観に支えられている。したがってその個別世界が地上世界とどこで接するかの境界、つまり入口(出口)をもつか、という場合、人体の左右の肺が、一つの喉口で息の出で入りを行うように、「黄泉比良坂」を入口あるいは出口の共通の通路としたことになる⁽¹⁸⁾。

あるいはまた西郷信綱も、

根の国の話なのに、なぜその出口を黄泉比良坂と称するか。それはこの二つの国が密接なつながりを持つて暗示する。(…)黄泉の国と根の国とは、地下という世界の二つの側面、一つのもの二つの違ったあらわれである⁽¹⁹⁾。

と述べている。

むろん、「黄泉国」の地下他界性を徹底批判する佐藤正英・神野志隆光の論を通過した立場からは無前提には賛同できないかもしれないが、果たして地下という要素を、神野志隆光のようにまったく排除できるかどうかである。また、「地下」という要素を、直ちに「垂直性」という位相に結びつける必要もあるかどうかである。

「天父・地母」という神に対する世界大の観念を、『古事記』も踏襲しているのではないかと考える。それは「高天原」を本源とする天つ神(↓皇孫)は、ニギノミコトを典型とするように常に男性神として表象され、祇つ神(↓地霊)は、コノハナサクヤビメを典型とするように女性神(↓巫女)として表象されるのである。オホヤマツミヤオホワタツミがたとえ父の神として登場してきても、それは常に服従する側として、ジェンダーとしては「女」として、劣位項として位置づけられているのだ。

「天父」イザナキに対して、「地母」はイザナミである。大地の生成力は、女神の力、それも母神の力、母性原理として理解される。大地の女神、大地母神は、「死」と「生」という相反する力を有している女神だ⁽²⁰⁾。

前掲西郷信綱論文の指摘に沿って理解するならば、「黄泉国」の支配者、「黄泉国」は、再び蘇ることのない永遠の「死の国」と理解される。対してスサノヲが希求した「妣が国根之堅州国」は、同様に母性原理が働いている世界ではあるが、「根之堅州国」は、「再生の国」・「生成の国」として理解される。どうやら『古事記』は、大地母神の「死」と「生」の相反する性格を、「黄泉国」と「根之堅州国」と分担させているものらしい。(主宰神のスサノヲは、父神として表象されているが、ジェンダーとしては「女」の立場にあると理解すべきであろう。)また、「妣の国」はひとつではなく、

御毛沼命は、浪の穂を跳みて常世国に渡り坐し、稻水命は、妣の国と為て、海原に入り坐しき。(138頁)

とあるように、天孫と海神の娘との間に生まれた稻水命にとって「妣の国」
 Ⅱ「海原」であつた。イザナキがスサノヲに最初に統治を委任したことは、「汝命は、海原を知らせ」(54頁)が想起されるが、「海原」Ⅱ「妣の国」であるならば、これも同じ母性原理の世界であることが推察されるであろう。

5 「根之堅州国」のイメージと大地の生成力

ところで「根之堅州国」の大地的な性格は、如何なるところに見られるだろうか？オホナムチが「死(↓仮死)」と「再生」とを繰り返して拡大再生産をし、最終的にオホクニヌシ(↓大國主)となる話の大枠じたいが、すでに死と再生のモチーフに彩られた母性原理による再生力を主題としているのだろう。翻って冒頭の「稲羽の素戔」のエピソードも、

是に、大穴牟遲神、其の菟に教へて告らししく、「今急やけく此の水門に往き、水を以て汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲黄を取り、敷き散して其の上に輾転ばば、汝が身、本の膚の如く必ず差えむ」とのらしき。故、教の如く為しに、其の身、本の如し。(78-79頁)

とあるように、同じく「再生」をモチーフとした話であつたということに気づくのである。ともあれ、

火を以て猪に似たる大き石を焼きて、転ばし落しき。爾くして、追ひ

下り、取る時に、即ち其の石に焼き著けらえて死にき。爾くして、其の御祖の命、哭き患へて、天に参る上り神産巢日之命に請しし時に、乃ち 貝比売と蛤貝比売とを遣して、作り活けしめき。爾くして、貝比売きさげ集めて、蛤貝比売待ち承けて、母の乳汁を塗りしかば、麗しき丈夫と成りて、出て遊び行きき。(79頁)

焼死したオホナムチを復活再生させたのは、赤貝と蛤(↓女性性器の喩)と母神の乳汁であり、彼は母体回帰をしよう一度産まれ直したという趣である。もつともこの出来事は、「葦原中国」においてのできごとではあつたが、「根之堅州国」においても、同様に「死と再生」をモチーフとした試練は繰り返される。

其の蛇の室むろに寝ねしめき。是に、其の妻須勢理毘売命、蛇のひれを以て其の夫に授けて云ひしく、「其の蛇はむとせば、此のひれを以て三たび挙りて打ち撥へ」といひき。故、教の如くせしかば、蛇、自ら静まりき。故、平らけく寝ねて出でき。亦、来し日の夜は、呉公むかでと蜂との室に入れき。亦、呉公と蜂とのひれを授けて教ふること、先の如し。故、平らけく出でき。(81-82頁)

生命に関わるような試練、「蛇」と「呉公」と「蜂」の危難は、「根之堅州国」で娶つた妻スゼリビメ(↓異郷の女)の助力によって回避することになる。女の呪力であり、「妹の力」である。「室」は、出入口はあつても窓の無い中空部屋であり、「魂」が充実・増殖する(↓魂触たまふ)ための、「うつほ」や「かひ」あるいは、「竹取物語」のかぐや姫における竹の「よ」などのように、異郷の時空と通底した中空の呪的な容器を想起させる部屋である。

亦、鳴鏑を大き野の中に射入れて、其の矢を採らしめき。故、其の野に入りし時に、即ち火を以て其の野を廻り焼きき。是に、出でむ所を知らずありし間に、鼠、来て云ひしく、「内はほらほら、外はすぶすぶ」と、如此言ひき。故、其処を踏みしかば、落ちて隠り入りし間に、火は焼え過ぎにき。爾くして、其の鼠、其の鳴鏑をひ持ちて出で来て、奉りき。其の矢の羽は、其の鼠の子等、皆喫へり。(82-83頁)

ここでは、動物の助力によって生命が救われる。「鼠」は、その名称「ねずみ↓根棲み」に、「根之堅州国に棲んでいるもの」という意味合いが込められている。駄洒落だといってしまうばそれまでだが、「鼠」の巢穴といい、「蛇」、「呉公」、「蜂」(↓地蜂か)といった穴居生物が、「根之堅州国」の世界イメージを形成していることもたしかである。西郷信綱も、《蛇・ムカデ・蜂がここに出てくるのは、たんに人間に害を与えるからではなく、それらが土中穴居の毒虫であったからに他ならぬ。そして次は、「穴居小獣」たる鼠の出番であったというわけである》⁽²¹⁾と説いている。

そもそも「大穴牟遲」という神名からは、地霊の表象としての蛇体の神の印象が読み取れるだろう。宛て漢字どおり音を起こせばオホナムチ OHO-ANA-NU-CHIだが、「穴」が、果たして字義どおり「穴」を意味するかどうか、怪しい。だから単に宛て漢字だと理解して、「OHO-ANA」の重母音を約すと、通行のオホナムチ OHO-NANU-CHI となる。

オホナムチ OHO-NANU-CHI を高崎正秀は、オホ OHO (大) を美称、ナム NANMU は、長虫 (蛇) を意味する古語 NANMU・NABI であり、チ CHI とウウ 接尾語は、IKA-ZU-CHI (雷)・NO-ZU-CHI (野椎) などと同様に、霊物を意味する CHI (靈) であると説く⁽²²⁾。蛇を指示する古語が、NABI や NABUSA、NAMI・NAGI・NADE・NUDE・NUGI・

NUBI・NAGA・NUGA・NAZI・NUZI というように、N音で始まるころに特徴があり、大和三山の畝傍山は、地霊の表象としての U-NEBI 蛇・YANMA であり、現代の U-NAGI 鱧や A-NAGOO 穴子等の語にもその遺留が見てとれる⁽²³⁾という。

5 「黄泉国」の漢字表記の意義と「根」の「片隅」|| 周縁の国

佐藤正英と神野志隆光の論を通過することにより、「黄泉国」と「根之堅州国」とは、黄泉比良坂を隔てた「葦原中国」の水平方向にある他界として、位置が定まってしまうた感があるが、果たしてそうか。

西條勉は、佐藤正英の「黄泉国」|| 山中他界説を批判して次のようにいう⁽²⁴⁾。

和語のヨモ(ヨミ)が漢語の「黄泉」で捉えられたとき、死者の世界が、もともとの山中から地下の方に移し換えられたことを示すのではないか。和語の原義をストレートに表そうとすれば、「豫母都国」などのように字音で表記されたはずである。益田勝実は、ヨモツクニの原義を「四方つ国」の意とし、中心としての生者世界(中つ国)に対して、死者の世界が周縁にイメージされていることを示すと解釈した⁽²⁵⁾。だが、かりに原義がそうだとしても、なぜその「四方つ国」が「黄泉国」と書かれたのか。ここには、タカマノハラを「高天原」、トコヨノクニを「常世国」、ネノクニを「根国」と書くこととはちがう問題がひそんでいる。これらは訓でよめば、そのまま和語に対応するが、「黄泉国」はヨモツクニの訓表記ではない。和語の意味に重きを置いた書き方ではないのである。和語表現を志向する古事記にはそぐわないことだが、このばあいは、和語のヨモ(ヨミ)が、漢語の「黄泉」に翻訳されたかたちになっているのである。

西條が指摘するように『古事記』の編者が、ヨモツクニを、「黄泉国」と漢字で表記した時、「葦原中国」の水平方向に他界として位置付けられていたはずの「黄泉国」は、今度は「葦原中国」の遙か地中深い地下の他界、「黄色い泉の湧く場所」として再度位置づけがし直されたことになる。『古事記』の編者は、意図としては垂直的に、「高天原」―「葦原中国」―「黄泉国」という位階序列（ヒエラルキー）によって、読者が権力的に捉えてくれることを期待して、ヨモ（ヨミ）に、この「黄泉」という漢字を用いたものと推察する。〈アメ〉―〈クニ〉の、〈クニ〉の範疇を逸脱してまでである。小稿の冒頭で私は、「水平か垂直か」という二者択一的な思考、近代的な合理観では『古事記』の宇宙は捉えられない由、述べている。そのように「黄泉国」は、「葦原中国」の水平方向に在りかつ、地下他界として垂直方向にも存在することになる。これは明らかに「矛盾」である。だが、この「矛盾」こそが現行の『古事記』であり、その宇宙の姿なのだ。

それでは、「根之堅州国」の方はどうか？『古事記』には「根之堅州国」は在るが、『日本書紀』や『祝詞』に在る「根国」は存在していない。このことは何を意味するのか？「根の国」と「根之堅州国」とは、とりあえず別なものとして区別しておく必要があるということだ。だから『古事記』に在るのは、黄泉比良坂を「黄泉国」と共有する境界・通路としている「根之堅州国」の方であって、「根国」ではないということになる。

それでは単刀直入に、「根之堅州国」とは何か？名義を現行諸注のほとんどが、「堅州」を「堅い砂」・「堅い州」と理解しており、どうやら「地底」の「堅い州」の「国」だというのが通説らしい。地下他界の垂直性を否定する神野志隆光も、『はるか果てにある堅い州の国を意味する』⁽²⁶⁾というが、しかし、どこに《堅い州》のイメージが存在するのだろうか。遺憾なことに『古事記』の「根之堅州国」の話のどこにも堅い州が描かれて

いないのは、「堅い州」の「国」という名義理解にとっては致命的ではないのか。

大野晋は岩波日本古典文学大系本補注において、根は、根本の意で、本貫というような意味をもつ語であるから、あるいは母の国なる大地の意と見る方がよいかも示れない。

とし、『岩波古語辞典』においても、

ネはナ（大地）の転。カタスクニは方ツ国の転か。大地の方角にある国の意で、現世の地上の国に対して、地下の国。

としている。

ところでその「根国」は、『日本書紀』には「極遠之根国」（第五段一書二）・「底根之国」（第七段一書三）、『祝詞』には「根国底之国」（大祝詞）とある。

本居宣長は『古事記伝』（七巻）において、

堅州国は、片隅国の意なり、そは横の隅にはあらで堅の片隅にて、下つ底の方を云なり、

と「片隅国」を提示しており、むしろ神野志隆光の否定するところではあるが、「片隅」＝周縁だと理解すれば、大地の周縁の国という理解となる。「根之堅州国」とは神野志が唱えるように水平的な周縁であり、かつ宣長が唱え神野志が否定するところの垂直的な周縁でもあることになるうか。

『古事記』の宇宙は、民俗の他界観である水平他界観と新たに政治的な文脈で捉えなおされた垂直他界観と、その交錯したところに成立している。一貫性・整合性というものは無視されており、明らかに矛盾のうえに成り立っているといわざるをえない。垂直他界観と水平他界観の交錯、それがこの宇宙の正体なのである。

注

- (1) 研究史を振り返ってみると、鳥居龍蔵「妣の国」松本信広編『論集日本文化の起源 3 民族学Ⅰ』平凡社一九七一年、初出一九二二年が、東部シベリアのヤクト族・コリヤーク族が宇宙を天界・地上・地下の三界に分けて考えていることを紹介するとともに日本神話における「高天原」・「葦原中国」・「黄泉国」との類似を指摘している。それを倉野憲司「古代人の異郷観」『古典と上代精神』至文堂一九四二年や西郷信綱『古事記の世界』岩波新書一九六七年らの論考によって追認され、定着・通説化した考え方のようである。
- (2) 佐藤正英「黄泉国の在りか『古事記』の神話をめぐって」『現代思想』一九八二年九月、臨時増刊号。
- (3) 神野志隆光「黄泉国—人間の死をもたらすもの—」『古事記の世界観』吉川弘文館一九八六年。
- (4) 神野志隆光「根之堅州国—「葦原中国」の完成—」『古事記の世界観』吉川弘文館一九八六年。
- (5) 松岡静雄「ヨモツクニ」『日本古語大辞典』刀江書院一九二九年、復刻版・東出版一九九五年。
- (6) 松村武雄「黄泉国の観念・信仰」『日本神話の研究』第四卷、培風館一九五八年。
- (7) 「神話の言語」注(1)の西郷信綱の著書所収。
- (8) 神野志隆光「葦原中国—神話的世界の機軸—」『古事記の世界観』吉川弘文館一九八六年。
- (9) 冊封とは、「冊(文書)を授け封建する」意であり、中国皇帝がその周辺諸国の君主と名目的な君臣関係を結ぶことで冊封を受けた国の君主は、中国皇帝から爵号を授かることになる。たとえば光武帝から「倭の奴国王」の金印を授かり中国王朝と朝貢する関係となったことが『後漢書』に記されているが、これは冊封を意味する。冊封によって作られた中国を中心とした複数の国の国際秩序を、「冊封体制」と呼ぶが、これは西嶋定生「六—八世紀のアジア」『岩波講座日本歴史』岩波書店一九六二年の提唱した概念である。
- (10) 神野志隆光「解説」『新編日本古典文学全集古事記』小学館一九九七年。
- (11) 西條勉は「神話世界の成り立ち」『古事記と王家の系譜学』笠間書院二〇〇五年において、『神野志は「葦原中国」の「中国」を中華中国の意味にとり、これを「中州」「六合の中心」(神武即位前紀)につなげて「葦原中国」は天孫の統治によって王化されるべき中心の国と解釈した。(…)しかし、和語のナカは上下もしくは前後・左右の位置関係における中間を示すのが一般であり、中華中国のような価値関係における中心・中央の意味はない。(…)文脈での裏づけが必要である』とし西條は用例を検討して、『葦原中国』は、天つ神によってコトムケされるべき国つ神の領域を示している。これに対して「葦原水穂国」は、コトムケされたあとに天つ神が降臨すべく予定されている下界である。つまり、古事記では「葦原中国」を国つ神の領有する荒ぶる世界とし、「葦原水穂国」は天つ神の統治すべき聖なる世界として、両者が正と負の対立よってはつきり区別されている』として、神野志隆光の論を批判している。
- (12) 注(11)の西條勉論文と同じ。
- (13) 注(2)の佐藤正英論文と同じ。
- (14) 井手至「所謂遠称の指示語ヲチ・ヲトの性格—上古における他界観念との関連において—」『国語と国文学』一九六〇年八月。
- (15) 注(3)の神野志隆光論文と同じ。
- (16) 注(3)の神野志隆光論文と同じ。
- (17) 注(3)の神野志隆光論文と同じ。

(18) 中村啓信「黄泉」について『古事記年報』36号、一九九四年一月。

(19) 西郷信綱「黄泉の国と根の国」『古代人と夢』平凡社一九七二年。

(20) 松村武雄『日本神話の研究』第二卷、培風館一九五五年。ミルチャ・エリアーデ『神話と夢想と秘儀』国文社一九七二年など。

(21) 西郷信綱「大國主神」『古事記注釈』一九七六年。

(22) 高崎正秀「大國主神名義考」『高崎正秀著作集 第一卷 神劍考』桜楓社一九七一年。

(23) 高崎正秀「神奈備山考」『高崎正秀著作集 第一卷 神劍考』桜楓社一九七一年。

(24) 注(11)の西條勉論文と同じ。

(25) 益田勝実『古事記』筑摩書房一九八四年。

(26) 注(4)の神野志隆光論文と同じ。

〔付記〕

小稿は、二〇〇〇年八月、学術団体物語研究会の夏季大会（於八ヶ岳自然文化園）における口頭発表「黄泉の国と根の堅洲国の区分・領域―『古事記』の宇宙論再検討―」に基づいて、新たに稿を起こしたものである。年間テーマ「区分・領域（テリトリー）」にふさわしいものとして意気込んでの発表ではあったが、結果は惨憺たるものであった。以来、本年までの「日本神話購読」の授業テーマとして、毎年この問題を検討してきた。発表当時厳しい批判を寄せくださった諸氏に、記して謝意を表す。